

斎藤秀三郎と日本の英語教育

— 『熟語本位英和中辞典新版』 から見えてくるもの¹⁾ —

八 木 克 正

1. はじめに

日本には、大学入試や私学の高校入試に受け継がれてきた独特の受験英語がある。その中には、I love him *all the better* for his faults. (欠点があるから却って好き) / I wish I were a bird. (鳥だったらいいのに) / I am sure you will *make a good soldier*. (君はきっと好い軍人に成れる) / A whale is no more a fish than a horse is. (鯨は馬と同じように魚ではない) のような名作がある。まじめに受験英語を学んだ人で、これらの例文を知らない人はないだろう。

中には、Woman as she is, ... / I had my wife die. / She is different from what she was ten years ago. / She runs as fast as any in her school. (最上級の意味で) のような、問題のある英語表現がある。

これらの例文は、遡れば、ほとんどすべて、斎藤秀三郎の著作、特に『熟語本位英和中辞典』(1915) にたどり着く。その斎藤の著作は、当然のことながら、後期

1) 本稿は、2018年7月14日に関西学院大学上ヶ原キャンパスで開催された関西英語語法文法研究会での講演に加筆したものである。この研究会は18年間、神崎教授と本稿筆者の八木が共同で運営してきた。この間、神崎教授と八木は多くの研究や英和辞典制作でも共同して作業に当たって来た。特に、斎藤秀三郎著・豊田実増補・八木克正校注『熟語本位英和中辞典新版』(岩波書店, 2016)の仕事においては、神崎教授は発音表記の全面的な校注を施す作業にたずさわった。本稿は、その校注作業と、その作業の副産物としてできた拙著『斎藤さんの英和中辞典—響きあう日本語と英語を求めて』(岩波書店, 2016)をもとにしたものである。

近代英語²⁾を材料にしている。つまり、日本の受験英語と言われてきたものは、後期近代英語に原点がある。

後期近代英語時代には、偉大な作家が多くの作品を残し、また規範文法がほぼ完成した時期でもある。従って、その時代の英語に範をとり、そこから表現を学ぶことは何も不思議ではない。ただ、言語は変化する。英語も日本語も変化することに疑いをはさむ人はないだろう。夏目漱石や森鷗外、芥川龍之介などの日本語は今の日本語とは同じではない。日本語を学びたいと思う海外の人たちは、日本文学の研究者は別にして、そのような大作家から学ぶよりも、今日的なアニメや漫画、テレビ番組、映画、新聞などから学ぶことを選ぶだろう。今の生きた日本語はそこにあるからである。

日本の英語教育の中身の一部として、受験英語という名で後期近代英語が残っているということは、端的に言えば、日本の英語教育の時代遅れそのものの現れである。そのような日本の英語教育の遅れを象徴する受験英語という名の英語の系譜をたどり、問題点を考えるのが本稿の目的である。そういう事実を明らかにしなければ、後期近代英語が受験英語という名のもとでいつまでも日本の英語教育の中に残ることになるからである。

斎藤の代表的著作である『熟語本位英和中辞典』は、豊田実によって同辞典の『増補新版』(1936)として訳語・語彙を追加し、さらには、再び豊田実による同辞典の『新增補版』(1952)において補遺が追加された。本稿筆者は、2012年に岩波書店辞典編集部から、『新增補版』の英語と日本語の両方に注釈を加えて、漢字仮名遣いを現代のものに改める作業の依頼を受けた。神崎教授と若い教え子と共にその作業を完成させ、斎藤秀三郎著・豊田実増補・八木克正校注『熟語本位英和中辞典新版』(岩波書店)として陽の目を見たのは2016年10月のことであった。

この作業を通じていろいろな発見があった。一番大きな発見は、斎藤が辞書の生命である用例を、当時入手可能だった文法書や辞書はもちろんのこと、自分自身が

2) 後期近代英語は、英語史の時代区分では西暦1700年から1900年とされる。欽定訳聖書(1611)や、シェークスピアは前期近代英語であるが、斎藤の著作の中では(古語)となる。

文学作品などから丹念に採取していることがわかったことであった。

第二の発見は、『熟語本位英和中辞典』の基本的な文法の枠組みは、*Practical English Grammar* (1898-9) が元になっていることが明らかになったことである。

さらに、第三の発見は、*Practical English Grammar* の品詞分類などの基本的な部分はイギリスを中心とした伝統文法の枠組みが元になっていることが明らかになったことである。

第四の発見は、『斎藤和大英辞典』(1928) が『熟語本位英和中辞典』の裏返しになっていることである。つまり、基本的には『熟語本位英和中辞典』の英語と日本語を入れ替えたものが『斎藤和英大辞典』なのである。

このように、斎藤の代表的著作のうちの三つの *Practical English Grammar*、『熟語本位英和中辞典』、『斎藤和英大辞典』が、それ以後の日本の英語教育の中核となって、受験英語の中身が形成され、それが部分的には今だに引き継がれているのである。

このような基本的な発見をもとに、今の日本の英語教育の中に根強く残っている受験英語の由来をさぐることは、今後の日本の英語教育の発展に重要な意味をもつと考える。その由来をさぐる出発点として、斎藤の人と業績を語っておこう。

2. 斎藤秀三郎とは

今の日本の英語教育界や英語学会では、斎藤秀三郎という名は知る人も少ないだろう。本稿筆者が大学で英語学の勉強を始めた頃（1965年頃）、指導教授に斎藤秀三郎の業績を勉強する価値があるかどうかたずねたところ、規範文法だから勉強する値打ちはない、という趣旨の返事をもらった記憶がある。

斎藤の名前は明治後半から昭和初期にかけての英学の歴史の中では際立った存在であるが、市河三喜、細江逸記、大塚高信などによるいわゆる科学的文法の時代になって、英学から英語学³⁾へと移行してゆく時期に意識的に斎藤の名前は忘れられ

3) 「英学」は江戸時代からの「蘭学」に倣った命名で、英語を研究することもさることながら、英語で書かれた書物を通じて西洋で知られたあらゆる分野の知識を学ぶ学問である。その意味で

ていった。斎藤の名前は、斎藤秀三郎著『熟語本位英和中辞典・増補』に残ったが、この辞典の日本語も英語も難解であり、1960年頃にはすでに一般的に使われる英和辞典ではなくなっていた。

このように、時代の流れの中で斎藤の名前は忘れられたが、彼の著作から英語教育の中身の中核部分が形成されていることは紛れもない事実である。そのことは、拙著『斎藤さんの英和中辞典—響きあう日本語と英語を求めて』（岩波書店、2016）によって明らかにした。

斎藤秀三郎を紹介するために、略年譜⁴⁾からいくつか本稿にとって大切な事項をあげておく。

慶応2年（1866）仙台にて誕生。

明治26年（1893）第一高等学校教授。

明治29年（1896）正則英語学校を創立、校長となる。

明治37年（1904）東京帝国大学文科大学講師。

昭和4年（1929）逝去 享年64歳。

主な著作は以下の通りである。

- ① *English Conversation-Grammar* (revised by James Main Dixon) 明治26年（1893）
- ② *Practical English Grammar*. 明治31-32年（1898-9）
- ③ 『熟語本位英和中辞典』大正4年（1915）
- ④ 『携帯英和辞典』大正11年（1922）
- ⑤ 『斎藤和英大辞典』昭和3年（1928）
- ⑥ *Monographs on Prepositions* 昭和7年（1932）

は、斎藤の「英学」は英語という言語の習得に特化した「英語学」と考えて差し支えない。ただ、日本の英語学研究の歴史の中では、科学的な英語研究と、それ以前の伝統文法の延長としての英語学を区別するために、斎藤までを英学の中に収めておくという考え方が広く行き渡っている。

4) 鶴見大学図書館編『斎藤文庫目録：斎藤秀三郎先生旧蔵英語学関係資料目録（1982）。

⑦ *Studies in Radical English Verbs* 昭和8年（1933）

⑧ *Advanced English Lessons* 昭和9年（1934）

これらの著作は明治、大正、昭和を通じて日本の英語学習者に大きな影響を与えた。後に科学的文法を主張する市河三喜も若い頃は斎藤の著作で英語を勉強し、斎藤が創設し、校長を務めた正則英語学校で英語の薫陶を受けている。

豊田実『日本英學史の研究』（1939）で、日本の英学の歴史を振り返り、1800年頃からの英語研究の古い文献を検証した後で、「日本における英文法研究を眞の研究の域に進めた人は齋藤秀三郎であつた。」と述べている⁵⁾。

本稿で明らかになるが、斎藤の著作は、言語事実に基づいた記述が基本である。言語事実を記述することが科学文法の基本であるとするれば、斎藤の研究成果は、科学的であると言ってさしつかえない。ただ、対象が日本で英語を勉強する人たちなので、啓蒙的、規範的であるという性格をもっていることは事実である。

3. 斎藤秀三郎の英学

斎藤の学問の際立った特徴は、正則英語であることとイディオム（熟語）を重視したことの二つである。以下、それぞれについて紹介する。

3.1 正則英語

正則英語とは変則英語に対することばである⁶⁾。変則英語は、発音を軽視、あるいは無視し、漢文の訓読に学んだような英語の読み方をする読解を中心とする。幕末から明治の前半までの英語学習法・教授法は、この変則英語が主流であった。英語を学ぶと同時に、西洋の事情や学問を学ぶためにはその方法が適していた。

これに対して斎藤が唱道する正則英語は、直読直解を重視する。文法に則って逐

5) 拙著『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?』でもこの点を論じた。

6) 拙著『斎藤さんの英和中辞典』（2016）の資料6「正則とは」（pp.233ff.）

語訳するのではなく、英語に対応する日本語表現を求めるという方法である。この方法をとることで、日本語に対応する英語を発信できるようになると考える。ただし、決して英語を英語で理解するという方法をさすのではない。あくまでも対応する英語と日本語を探し求めて、その知識を英語の読解にも、英語での発信にも利用するという考え方である。発信のためには、発音も重視することは当然である。

本稿筆者は『斎藤さんの英和中辞典』の中で、英語と日本語を対応させた興味ある例を数多く挙げたが、そのうちのいくつかを再録しておこう。

(1) I would rathe die than batten on ill-gotten gains.

渴しても盗泉の水を飲まず

(2) The dyer is proverbially behind time with his work.

紺屋のあさって

(3) I must not compromise my honour.

李下に冠を整さず

(4) That's one consolation.

不幸中の幸い

(5) Our labours were crowned with success.

労して功あり

このような対応関係を見つけるのが正則英語なのである。

3.2 熟語重視

次に、イディオム（熟語）を重視するとはどういうことかについて述べよう。斎藤は「イディオモロジー」(idiomology) という用語を作った。斎藤と同時代の人たちは、そんな用語は英語にはないなどと批判したが、*New Standard Dictionary of the English Language* (1928) や *Webster's Third New International Dictionary* (1961) にこの用語が収録されている。斎藤の造語が英

語辞典に収録されているのである。idiomology は「熟語」の意味の idiom と「学問」の意味の -ology からなる合成語で、表す意味は今で言う phraseology (phrase + ology) と変わらない。

『熟語本位英和中辞典』の英語名は、*Saito's Idiomatic English-Japanese Dictionary* である。ここに idiomology の形容詞形 idiomatic が使われているが、これは「熟語本位」に対応する英語である。同辞典ではこの idiomology を「慣用語法学」と訳している。

英語に限らず、言語を学習するためには、イディオムや成句、コロケーションを学ぶことが大事であることは古くから知られている。古くは近代的な辞書作成の草分けである Dr. Samuel Johnson が、*A Dictionary of the English Language* (1755)、通称 Johnson's Dictionary を編纂するにあたって書いた“The Plan of a Dictionary”の中でイディオムの重要性を強調したが、辞書の中では実践できなかったという⁷⁾。それを最初に大規模に実現したのは *The Oxford English Dictionary* (1888-1928, Supplement 1931) である。OED をもとに作られた縮刷版 COD (初版 1911) もイディオム重視を引継ぎ、成句やコロケーション記述の充実ぶりは、それまでの辞書とは比較にならない。

斎藤もこのような流れを受け継ぎ、イディオムやコロケーションを収集して、それを『熟語本位英和中辞典』の中にまとめあげた。

その後、日本の英語教育に多大の貢献をしたパーマー (Harold Edward Palmer, 1877-1949) やホーンビー (Albert Sydney Hornby, 1898-1978) も斎藤の研究成果を採り入れていた。Cowie (1999: 53) にパーマーの著作からの引用がある。そこでは、日本の英語教育のためにコロケーションの収集を企画していたパーマーやホーンビーは、斎藤が『熟語本位英和中辞典』の中に、すでに 5,000 ものコロケーションを収集していることを述べている。

When A. S. Hornby joined the collocation project, some 5,000 collocations

7) 永島大典『ジョンソンの『英語辞典』』(1983: 195ff.)

had already been gathered from Professor Hidesaburo Saito's *Idiomological English-Japanese Dictionary* (Palmer, "Editorial: Our research on collocations," *IRET Bulletin* 95 (1933), "Director's report for the year," *IRET Bulletin* 108 (1934))

このようなコロケーションを重視する考え方は、パーマーを通じてイギリスのロンドン学派のファース (John Rupert Firth, 1890-1960) に受け継がれ、言語学の重要な分野としての位置づけがなされた。その事情を記したロンドン学派に属していたシンクレア (John McHardy Sinclair, 1933-2007) の記述を引用する：

The idea of collocation first emerged in the work of language teachers between the world wars, particularly that of Harold Palmer in Japan. In the 1950's J. R. Firth gave collocation a key place in his spectrum of linguistic meaning, and Machael Halliday and John Sinclair developed the idea in various publications during the 1960's. [Sinclair et al. (2004)]

コロケーションに重要な言語学的位置づけをしたファースの思想がハリデーやシンクレアに受け継がれたことがこのような記述から分かる。

学間は相互に影響を与える。斎藤は、英米の伝統文法を受け継ぎ、ジョンソンの英語辞典や OED, COD の影響をうけ、日本の英語学習者のために独自の研究成果を発表した。たまたまその時代に日本で英語教育のリーダーであったパーマーやホーンビーの考え方と一致し、それがイギリスのロンドン学派にも影響を与えたという図式が明確に浮かび上がる。

イディオム、成句、コロケーション、あるいは諺を重視するという言語研究の方向は、20 世紀末になって改めてフレイジオロジー (phraseology) という名でヨーロッパを中心に新たな展開を見せるようになった。その中心にはシンクレアがいる。フレイジオロジーについて述べる余裕はないので、八木・井上『英語定型表現の研

究』(2016)を参照されたい。

このように、斎藤は日本ばかりでなく海外にも大きな影響を与えたことがわかる。その影響の大きさゆえ結果的に、彼以降の日本の英語教育の中身に長く受け継がれ、今の時代にまで、あたかも後期近代英語が正当な英語であるような錯覚を起こさせている。

4. 斎藤英学の4つの源流(1) - 伝統文法の流れ

4.1 斎藤英学と伝統文法

第3節で述べた斎藤の学問を「斎藤英学」と呼ぶことにする。斎藤英学は明治時代に突如現れたわけではない。そこには4つの源流がある。斎藤英学はその源流をもとに、斎藤独自の研究によって築かれたものである。

斎藤英学は、イギリスで発達してきた伝統文法の流れの延長上に置かねばならない。この伝統文法は4つの源流の第一であり、そこにこそ斎藤英学の根本がある。その伝統文法が斎藤英学の中にどのように生きているかを見ることから始めよう。

4.2 伝統文法とは

イギリスで最初に作られた英文法書は William Bullokar, *Bref Grammar for English* (1586) である。詳細は省くが、それ以後おびただしい数の英文法書が出され、約200年後に Lindley Murray, *English Grammar* (1795) によって英文法の全体的な形が固まった⁸⁾。ラテン語文法的をもとにしながらも、独自の英文法の基本になる、品詞、文の分析法、動詞の法、時制などの名称が確立してきた。斎藤英学が、このような伝統文法と無関係に文の分析や品詞分類などに必要な独自の用語を生み出したというようなことはありえない。大村(1960)『斎藤秀三郎伝』

8) この間の事情は渡部(1975)『英語学史』に詳しい。また、拙著(2007)『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?』(46-56)、住吉(2016)『規範からの解放』第2章にも解説がある。

の随所⁹⁾に、斎藤がどのような文献に接していたかが述べられている。斎藤が見た可能性のある文法書の一部のをあげてみよう。

- ① Lindley Murray (enlarged by John Davis) (1830) *Murray's English Grammar, Adapted to the different Classes of Learners.*
- ② William Swinton (1887) *A Grammar Containing the Etymology and Syntax of the English Language.*
- ③ William Malone Baskervill & James Witt Sewell (1895) *An English Grammar for the Use of High School, Academy, and College Classes.*
- ④ Charles Talbut Onions (1904) *An Advanced English Grammar.*
- ⑤ John Collinson Nesfield (1908) *Manual of English Grammar and Composition.*
- ⑥ Edward Adolf Sonnenschein (1916) *A New English Grammar.*

これらの文法書は明治から大正にかけて日本で広く使われていた。いずれも基本的にはマレーの文法書の枠組みから大きくはずれることはない。これらの他に、科学的伝統文法と言われるスイート (Henry Sweet) やイエスペルセン (Otto Jespersen) の文法書も参照しているであろう。

ここで Murray の文法の枠組みを簡単にまとめてみよう。

- (i) 品詞分類：名詞、形容詞、副詞、動詞、接続詞、間投詞、前置詞、代名詞、冠詞の9品詞。
- (ii) 人称代名詞の格：名詞に主格、所有格、目的格の3つの格。

9) 例えば p. 244 に、斎藤と同時時代の前置詞研究の文献にあげられた参考書目を引用し、おそらく斎藤もこれらの文献を読んだに違いないという記述がある。斎藤の時代では、また参考文献を列挙するということが一般的ではなかった。だから、斎藤がどの文献を参照したかは確定的には言えないことが多い。本稿筆者は、『熟語本位英和中辞典新版』の校注において、用例の出典を調査したが、数多くの文法書や英語辞典にその源を求めることができることが明らかになっている。

(iii) 時制：現在、過去、未来、現在完了、過去完了、未来完了 6つの時制。

(iv) 法：直説、命令、可能、仮定、不定の5つの法。

(v) 助動詞：will, shall の用法を指定。

『実用英文典』での品詞分類（名詞、冠詞、形容詞、代名詞、動詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞）、人称代名詞の格（主格、所有格、目的格）はマレーの枠組みと同じである。法は、直説、命令、附属、条件、不定、分詞、動名詞の6つで、マレーと重なる部分はあるが、完全に同じではない。

詳細にわたると異同はあるが、全体的な枠組みは変わるところは少ない。文法の全体的な枠組みは変わらずとも、詳細に関しては個々の文法家がそれぞれ独自なものを主張することは現在でも変わらない。基本的枠組みは、16世紀末から200年かけてマレーに収束し、それがさらに修正を加えられているのである。その一例として、文型といわれるものをみてみよう。

4.3 5文型

日本の英語教育の中で5文型の学習と理解は基本事項のひとつである。この5文型も伝統文法の中で徐々に確立してきたもので、最初からあったものではない。斎藤の *Practical English Grammar* (1898-1889) には5つの文型が記されている。日本で巷間知られているところでは、アニアンズ (Charles Talbut Onions, 1873-1965) が初めて *An Advanced English Syntax* (1905) で提唱し、それが細江逸記『英文法汎論』(1917)で敷衍されて日本の英語教育界に定着したとされてきた。そうすると、アニアンズよりも斎藤の方が先に5文型を掲げたことになる。この矛盾点を解明する5文型の成立過程は、川嶋正士『「5文型」論考 - *Parallel Grammar Series, Part II* の検証』(2015)によって明らかになった。

もともと伝統文法は、文を主部と述部に分けることから始めて、述部の中心になる動詞がどのような補足部をとるかを分類することが課題のひとつであった。動詞には目的語をひとつとるもの、二つとるもの、目的語をひとつとってさらにその目的語を説明する補足部を取ると考える分析を最初に記述したのは、クーパー

= ソネンシャイン (A. J. Cooper and Edward Adolf Sonnenschein (1889) *An English Grammar for Schools*) であった (上記、川嶋正士 (2015) による)。

それ以前の文法書のうち、日本でよく使われていたスイントン (William Swinton (1887) *A Grammar Containing the Etymology and Syntax of the English Language*) では、まだ今で言う第5文型がない。だが、直後の文法書で、斎藤もよく利用したネスフィールド (John Collinson Nesfield (1895) *Idiom, Grammar, and Synthesis. English Grammar Series, Book IV*) では、動詞の補足部を3種類に分けて、5文型を明記している。従って、斎藤がクーパー=ソネンシャインあるいはネスフィールドの記述を採り入れて、*Practical English Grammar* で5文型を提示したと考えることに何の不都合もない。

このように歴史を追ってゆくと、アニアンズを細江が紹介し、敷衍したことで5文型が日本で根付いたことは事実だが、アニアンズが最初に5文型を提唱したのではないことは明らかである。

5. 斎藤英学の4つの源流 (2) - COD1などの英語辞書の影響

斎藤英学の源流のひとつは英語辞書である。特に1911年に *Concise Oxford English Dictionary* の初版 (COD1) を克明に読んだ。大村『斎藤秀三郎伝』(pp.427ff.) は、斎藤の書き込みのあるCOD1の実物をみて、書き込みの日付から大正元年 (1912) から大正三年 (1914) にかけて丹念に読んでいることを跡付けている。実際に、『熟語本位英和中辞典』にはCOD1から採ったと思われる用例が数多くある。『熟語本位英和中辞典』のfollowの項の全用例を以下にあげよう。太字の部分はCOD1にあるもので、*は斎藤独自のものである。

cast a shadow*

May your shadow never grow less!

catch at shadows

There is not a shadow of doubt—**without a shadow of doubt**

He is **worn to a shadow**.

He is **but a shadow of his former self**.

Coming events cast their shadows before.

shadows of night

He is **content to live in the shadow**.

It lies under the shadow of the castle.*

be **under the shadow of misfortune**

A shadow fell on me.*

lights and shadows*

We are secure **under the shadow** of the Almighty.

COD1 の用例にすこしづつ変更を加えている様子もわかる。それに独自に収集した用例を加えていることもわかる。

6. 斎藤英学の4つの源流 (3) —英米の辞書類

斎藤はCOD1の他にも数多くの英語辞書を参照して、そこから用例をとっている。『熟語本位英和中辞典』の新版の校注のために行った調査で明らかになった、斎藤が参考にしたと思われる辞書類を以下にあげておく。

S. Johnson (ed.) (1775) *A Dictionary of the English Language*, 2 Vols.

F. Grose (1823, 改訂版) *Grose's Classical Dictionary of The Vulgar Tongue*.

C. H. Timperley (1839) *Dictionary of Printers and Printing*.

A. L. Elwin (1859) *Glossary of Supposed Americanisms*.

B. Charles Scholl (ed.) (1886) *A Phraseological Dictionary of Commercial Correspondence in the English, German, French & Spanish*.

- W. D. Whitney (ed.) (1827-1894) *The Century Dictionary and Encyclopedia*.
J. M Dixon (1891) *Dictionary of Idiomatic English Phrases*.
J. Wood (ed.) (1893) *Dictionary of Quotations from Ancient and Modern, English and Foreign Sources*.
Brewer's Dictionary of Phrase and Fable (1898).
J. Wood (ed.) (1899) *Dictionary of Quotations*.
Chambers's Twentieth Century Dictionary of the English Language (1903).
Ernest Mason Satow and Ishibasi Masataka (1904) *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*, third edition.
Encyclopaedia Britannica, 11th Edition, Volume 5 (1911).
S. Farmer (1912) *A Dictionary of Slang and Colloquial English*, Abridged ed.
Webster's Revised Unabridged Dictionary (1913).

ちなみに、豊田実が行った増補版では、OEDの補遺(1931)とマシューのアメリカ英語辞典 M. M. Mathews (ed.) (1951) *A Dictionary of Americanisms On Historical Principles* を参照している。

7. 斎藤英学の4つの源流(4) — 近代英語からの資料

『熟語本位英和中辞典』の中には、斎藤が独自に収集したと思われる夥しい数の近代英語の用例がある。『熟語本位英和中辞典新版』の校注を見れば一目瞭然だが、その一部を以下に再録してみよう。最初に『熟語本位英和中辞典』にある用例をあげ、その用例があげられている見出し語を()で示し、出典と思われる文献とその文献の原文を示す。原文の太字の部分は『熟語本位英和中辞典』に共通する箇所である。用例と原文を比較すると明らかであるが、少しずつ変更が加えられている。聖書から引用する場合は通常の略号を使う。

- (1) throw one into convulsions (CONVULSION)
「マルコ」(Mark) 9:26 After crying out and **throwing** him **into** terrible **convulsions**,...
- (2) Do to others as you would be done by. (DO)
「ルカ」(Luke) 6:31 And **as ye would** that men should do to you, **do ye** also to them likewise.
- (3) be one flesh (FLESH)
「創世記」(Genesis) 2:24 Therefore shall a man leave his father and his mother, and shall cleave unto his wife: and they shall **be one flesh**.
- (4) take at the flood (FLOOD)
Shakespeare, *Julius Caesar* (1599) 4:3 There is a tide in the affairs of men, /Which, **taken at the flood**, leads on to fortune.
- (5) do one a good office (GOOD)
Shakespeare, *The Merry Wives of Windsor* (1602) 3:1 We are come to you to **do a good office**, master parson.
- (6) lay a man by heels (HEEL)
Shakespeare, *Henry VIII* (1613) 5:4 If the king blame me for't, / I'll **lay ye all/ By the heels**,
- (7) Flesh is heir to many ills. (HEIR)
Shakespeare, *Hamlet* (1600-1) 3:1 The heart-ache and the thousand natural shocks /That **flesh is heir to** ...
- (8) Let beggars match with beggars. (MATCH)
B. Johnson, *The New Inn: Or, The Light Heart* (1631) 5:5 **Let Beggars match with Beggars** ...
- (9) He is equal to anything. (EQUAL)
J. Austen, *Sense and Sensibility* (1811) ... made Elinor feel **equal to anything** herself.

(10) tell fortunes by the lines of palms (LINE)

S. Johnson (ed.), *A Dictionary of the English Language*, Vol. 2 (1775) s.v. PALMISTRY “The cheat of foretelling **fortune by the lines of the palm.**”

(11) The house is going out of the windows. (HOUSE)

O. Goldsmith, *The Vicar of Wakefield* (1766) ... but one cannot help it when **the house is going out of the windows.**

(12) do one an ill turn (ILL)

D. Defoe, *Memories of a Cavalier* (1724) Ready ... **to** do us any **ill turn.**

(13) Ignorance is bliss. (IGNORANCE)

T. Gray, “Ode on a Distant Prospect of Eton College” (1747) ... where **ignorance is bliss**, ‘Tis folly to be wise.

(14) come a howler (HOWL)

H. G. Wells, *Marriage* (1912) That’s where all these Socialists and people **come a howler.**

個々の用例が引用した原文から採られたとは断言はできないが、『熟語本位英和中辞典』の用例と文献の原文との類似性は疑う余地はない。このような類似性をもった例は夥しい数に昇ることを示せば十分であろう。このように、斎藤の業績を支える数多くの辞書や文献、文学作品も夥しい数に上る。

8. 斎藤の独創性

学問的研究は、先人の研究を踏まえる。研究者が先人の研究を詳細に調べずに自らの新しい研究を行うことはできない。その例に違ふことなく、第4節から第7節まで見てきた斎藤英学の4つの源流のうちの第4節から第6節は、先人の研究成果を斎藤がいかによく研究していたかを明らかにしている。

一方、第7節は、独自の資料集めを如何に広範囲に行っていたかを証明している。斎藤英学は、この4つの源流を日本で英語を学ぶ人に合うように工夫をしてまとめると共に、斎藤独自の研究成果がちりばめられている。特に前置詞や動詞の分析と語義配列は現在の認知言語学の見地に基づく前置詞研究にも通じる、海外にはない独特のものをもっていた。前置詞と動詞の分析の研究成果は、後にまとめて *Monographs on Prepositions* (1932) と *Studies in Radical English Verbs* (1933) として公刊された。

斎藤の独自の研究成果の一部を拙著『斎藤さんの英和中辞典』の第3章第2節であげた。紙幅の都合で1例だけあげておく。

make の項に次の記述がある。

斯くて前置詞 “from,” “out of” は原料を示し、“into” は製品を示す、“out of” は材料を其儘合はせ又は組立て、作るの意味。又 “out of” は “made” に直接に續く時は “out” を略して “of” となる。

この記述は、今の日本の英和辞典をはじめ、参考書類ではごく普通に見られる記述である。しかし、斎藤より先にこの記述をした文献は今のところ見出せない¹⁰⁾。斎藤のこの記述以後には、OED を含めてこの記述が見られるようになった。

9. 英語教育の中身批判

本稿筆者は、1970 年半ばから、日本でいわゆる受験英語の一部に問題点があることを指摘してきた。拙著『新しい語法研究』(1987) では、Woman as she is の as の用法、I had my wife die. の have の用法、think が名詞の目的語をとる用法、it is impossible to do の impossible と it is impossible that 節の impossible は意

10) 拙著『斎藤さんの英和中辞典』pp.108f.

味が異なり、書き換えの関係にはないこと、to不定詞の形容詞用法には名詞とto不定詞の関係は多様な場合があることなどを明らかにした。いずれも、受験英語ではごく普通に教えられていたことである。

それ以後、関西学院大学に提出した博士論文がもとになった『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』(2006)、受験英語の問題点とその背景を明らかにした『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?』(2007)などを発表し、広く受験英語の問題点を指摘した。

このように、本稿筆者が若い頃におかしな英語として取り上げてきた例文の多くは斎藤の著作にさかのぼり、それらの多くは後期近代英語では実際に使われてきたものであることがわかる。そのつながりがわかる例をいくつか挙げてみよう。

10. 受験英語として残る後期近代英語の例

受験英語として今に残っている後期近代英語の例は枚挙にいとまがないが、紙幅の都合で2例だけあげておく。10.1は今は廃れた用法、10.2は今でも実際に使われる例である。

10.1 「逆説」のas

Woman as she is, she is competent.のような例文は受験英語の定番で、ひと昔前の受験生は必ず覚えたものである。本稿筆者は、40年ほど前から受験英語に存在するおかしな英語として問題視してきた。実際に今の英語としては受け入れられない英語である。asの前にこれるのは形容詞であり、名詞は段階性のある fool (Food as he is, ...)などに限られるというのが結論である。このような例は斎藤の創作であろうと考えていたが、今回の調査で、19世紀の文献には使われていたことがわかった。出典とともに例をあげておく。

..., *Woman as she is,*

— *Gentleman, Man Superior to Woman; Or, a Vindication of Man's Natural*
(1739)

... *woman as she is with respect to herself, ...*

— *The Eclectic Review*. Vol. 6, Part 2 (1812)

Waiter as he was, he had human passions and feelings, ...

— C. Dickens, *Nicholas Nickleby* (1838-1839)

現代英語では、譲歩の意味の *as* の前に無冠詞の名詞を置く用法は廃れた。
Young as I am, ... のような形容詞を *as* の前に置く用法は健在である。

10.2 否定の **no more A than B**

『熟語本位英和中辞典』の NO (副詞) の項に次の諸例がある。

He is no more (as little) a lord than (as) I am.

彼は僕と同然貴族でも (何でも) ない

He can no more swim than I can fly. 彼が泳いだなら僕は飛んでみせる

A whale is no more a fish than a horse is. 鯨は牛馬も同然魚ではない

COD には次のような例がある。訳は本稿筆者のものである。

is no more a lord than I am (私と同様君主ではない)

could no more help laughing than I could fly (笑いをこらえられたら空をも飛べる)

『熟語本位英和中辞典』の最初の 2 例との類似性が読み取れる。第 3 例は、日本の英語教育の中ではとりわけ有名で、「クジラの構文」などと呼ばれ、言語学的にも研究対象になってきた。このクジラの構文も実は 19 世紀の文献には類似の表現が多数見ることができる。いくつか出典と共に例をあげておこう。

The whale is no more a fish than the seal.

— Spencer Fullerton Baird, *The Sea Fisheries of Eastern North America*
(1889)

A whale is no more a fish than crocodiles, penguins, or seals, are fishes, ...

— *Popular Science Monthly*, April, 1883.

後世に残る名作の例文は、このような19世紀に実際に使われていた表現をもとに作られたことは疑いの余地がない。

11. 科学文法からの斎藤批判—それでも、斎藤

英文法の世界では、Henry Sweetの *A New English Grammar* (1881-91) が現れ、科学的な文法研究とはいかなるものかが明らかにされ、その科学的文法という思想の波は日本にも押し寄せた。市河三喜『英文法研究』(1912)が日本における科学的英文法研究の嚆矢とされる。細江逸記の『英文法汎論』(1917)や、大塚高信、岩崎民平、佐々木達などの市河の後継者も斎藤英学批判を強め、ついには斎藤の名前は科学的英文法研究者には無縁のものとなった。その後、日本の英文法、英語学研究は、安井稔、太田朗、小西友七などの次世代へと移っていった。

それにも関わらず、日本の英語教育や英和辞典や和英辞典の中に、いまだに十分検討されないまま斎藤の学説や斎藤の収集した後期近代英語が残っている。斎藤の名前こそ聞かれなくなったが、その業績はいたるところで見出すことができる。

12. おわりに

以上、今の日本の英語教育の中に根強く残っている受験英語の由来をさぐると、斎藤の著作に行き着くこと、そして、斎藤は後期近代英語を記述し、それを教材にし、辞書を作り、文法書を作ったことが明らかになった。昔の受験勉強をしてきた人は、

昔の受験英語は格調が高かったと言う人が多い。その理由は、材料が後期近代英語の文豪の作品や哲学などの書き言葉だったからにほかならない。本稿筆者の研究はこの事実を明らかにし、更なる英語教育の中身再考のきっかけになることを願う。

参考文献

- Cowie, A. P. (1999) *English Dictionaries for Foreign Learners: A History*. Clarendon Press, Oxford.
- 川嶋正士 (2015) 『5 文型』論考 - *Parallel Grammar Series, Part II の検証* 朝日出版社、東京。
- 大村喜吉 (1960) 『斎藤秀三郎伝—その生涯と業績—』吾妻書房、東京。
- 永島大典 (1983) 『ジョンソンの『英語辞典』』大修館書店、東京。
- 斎藤秀三郎著・豊田実増補・八木克正校注 (2016) 『熟語本位英和中辞典 新版』岩波書店、東京。
- Sinclair, John McHenry, Susan Jones and Robert Daley (eds.) (2004) *English Collocation Studies*. Routledge, London.
- 住吉誠 (2016) 『規範からの解放』(談話のことば2) 研究社、東京。
- 豊田実 (1939) 『日本英學史の研究』岩波書店、東京。
- 渡部昇一 (1975) 『英語学史』(英語学体系 13) 大修館書店、東京。
- 八木克正 (1987) 『新しい語法研究』山口書店、京都。
- 八木克正 (2006) 『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』開拓社、東京。
- 八木克正 (2007) 『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?』開拓社、東京。
- 八木克正 (2016) 『斎藤さんの英和中辞典—響きあう日本語と英語を求めて』岩波書店、東京。
- 八木克正・井上亜依 (2016) 『英語定型表現の研究』開拓社、東京。